

「嵐の前の静けさ」？ 十字路に立つ中国の人口政策

「一人っ子」政策の取り下げは一刻も猶予できない

—— 中国人民大学校長紀宝成を特別取材——

この翻訳文は 2009 年 4 月 9 日の「南方周末」（知識層に多くの読者を持つ週刊新聞）に掲載された記事を翻訳したものです。

<唐勇林（南方周末記者）の解説>

さらに厳格な「一人っ子」政策か

1980 年に中央政府が正式に発布した出産計画は、来年歴史の舞台から降りるべきか、今再び論争が起きている。

中国社会院マルクス主義研究院院長の程恩富は、先月（3 月）の全国人民代表大会に建議したが、その内容は、更に「一人っ子」政策を推進実施すべきというもので、中国の人口総数を減らし（将来の出産率を 1.2 人にまで低め、さらにはるか先には世代交代水準よりはるかに低い 2.1 人とする）、それをもって一人あたりの国民総生産と生活水準を米国、ヨーロッパ、日本並みに引き上げ、更に進んで、中国がまさに直面している環境、資源、都市化問題、就業等の多くの問題の解決に臨みたいというものである。

これに対し支持者の一人はネットで次のように述べた。「中国がもし 3 億の人口だったら多くの事情、矛盾はすらすら解決できる。中国人が、『広い国土だが、人が少な過ぎる』という感覚を持つまで出産計画はあくまで堅持すべきである」。ただしネット上の 13 万人の投票では反対票が 67.5%に達した。

さらに学会では反対の声が強い。学者の一部では、人口が多すぎるという観点は新しい問題ではない。この種の観点は、純粋に人口の多いことをある種の負担とみなし、人口を減らすことが唯一の或いは重要な目標であり、中国が当面している主要な矛盾である一人人口構成問題に目をむけていない。中国が人類の歴史上未曾有の速度で進んでいる高齢化と、男女性別比率のかなりの不均衡、それが及ぼす労働力人口の過剰から“不足”への将来における逆転等々に予測される問題についてである。

前世紀 80 年代初頭、中国で開始された「一人っ子」政策は 1984 年から大反発に遭遇し、逐次緩められてきた。現在は、「一人っ子」を生む率は総人口の 35.9%で、最初が女子出産で第 2 子を産むことが可能なのは 51%、二人の子を産むことができるのは 9.6%、全体として言うならば、中国の出産計画は「一人半」政策と理解することができる。

2000 年実施の全国人口調査後の新たな人口数に基づけば、中国の人口形成は既に歴史的転換を迎えているというのが人口学界における高度の共通認識であり、これは低出産の人口数問題で

はなく、将来の中国の人口上の解決しがたい問題の根源をなすものである。当時、わが国の連続8年間の出生率は世代交代水準（人口学定義では、夫婦一組が出産する子供の数の平均数が2.1人に達すれば世代交代が可能であるという）よりさらに低い。

これ以降、国内の権威ある人口学者の一群は、中国の人口動態には逆転が発生しており、試験期を乗り越えて実際の政策調整が必要であることを政府に提言している。

この時、更に厳格な「一人っ子」政策を進めること、「一人っ子」政策を緩める政策に反対することは「国力を弱める政策」であり強い拒否反応を示している。

時はすでに熟している

1980年、私権である「出産計画」に公権力が関与し、この政策は「一世代限り」の政策であることを明確にして中央政府は30年の時限立法とした。

「30年経過した現在、昨今特に緊迫している人口増加問題は緩和しており、異なった人口政策をとることを可能としている。」これは1980年9月発表の「中国政府の我が国人口増加問題の抑制に関する全共産党員と共産主義青年団員への公開の手紙」で出産計画政策が執行された時の説明である。この手紙が公開されてすでに29年経った。この手紙の中では、「一部同志が心配しているのは一組の夫婦が一人の子のみしか出産しない場合、例えば新しい問題一人口年齢の上昇、老化、労働力不足、男性人口が女性人口より多くなる、一組の夫婦が養う老人数が増加すること」などに付言している。

30年経過した現在、これらの「誤解」や「憂慮」していたことが、一つ一つ現実の問題となり深刻化している。中国の人口政策は中国最大の公共政策であり、歴史上の十字路をどこに向かわせるのか社会の強い関心を引き起こしている。

しかしすでに陣太鼓は打ち鳴らされた。17期第3回中央委員会は、2020年に中国は都市と農村の格差を基本的に無くすことを決めた。中国の人口問題専門家の王羊教授は、「2020年前の中国最大の公共政策の一つは人口政策であり、いったい都市が農村を手本とすべきかあるいは農村が都市を手本とすべきか、急速に回答が迫られている問題である」とした。

米国公共政策研究所の政治経済学者 Sherry Wendt、アジア問題専門家 Nicholas Eberstadt は大連の夏季ダボス会議に招かれた折、人口問題は全地球上の最後の危険な問題だという見方をしている。記者が取材した折、彼は「人口が半分になると人間は倍豊かになるという概念は、非常に雑駁であり自堕落な見方であり、その背後には中国人は囲われた檻の中の動物のようであり、咀嚼以外はこれらの周囲の資源に頼って何もしない」と話した。

実際、人類は富を創造し生活の向上を図るものである。20世紀を終えて、全地球の人口は3倍に増加した。更に人の収入は4倍に増えた。そして過ぎ去った200年の経験は土地と自然資源がそれほど重要でなくなって来つつあることを明らかにした。

「今日の社会にあっては、鉱山、森林、自然資源は国家の財産ではない。現在の本当の財産はその国民である」と Eberstadt は述べている。同氏はまたシンガポールの先例に注意すべきだと述べている。20世紀の70年から80年初めにかけてシンガポールで出産制限を大提唱したが、低出生率を招くことが急速に判明し、政策調整をしたが遅きに失した。10余年来「出生補助金」

政策等で出産を鼓舞したが、シンガポールは依然として世界一出産率の低い国である。

世界で出生率の低い国では、シンガポールと同様に育成鼓舞政策はすべて成功していない。我々は中国で出産奨励政策が成功するとはどうしても信じがたい。シンガポール、日本、韓国等の全ての国で出産奨励政策は失敗している。

「将来を待つ必要は無い。人口問題は後悔先に立たずである」。全国人民代表、中国人民大学校長紀宝成も又憂慮している。彼は過去 2 年の間、人民大学人口学系の基礎研究を以て連続して「二人出産」政策の承認を提案している。

<唐勇林の人民大学校長紀宝成への特別取材>

1 年前、全国人民代表大会代表、中国人民大学校長の紀宝成は、两会(全国人民代表大会、中国人民政治協商会議)で「我国の人口政策の完備に関する提案」を提出し、我国の現行の人口政策を改めて検討し、一步一步調整することを呼びかけていた。紀宝成のこの提案がマスコミで報道された後、多くの関心の的となり、社会に広く知られ、討論されている。

今年の两会で、紀宝成が再度「できるだけ早く我国の出産政策を調整することに関する提案」を提出したことは、世間にあまり知られていない。

彼は、2 年にわたり毎年出産政策の調整を提出した。その見出しの変化から、彼の人口問題に対する深い憂慮を見ることができる。彼は又経済学者、前商業部・国内貿易部・教育部の官吏、副部級の大学管理者でもあり、中国の人口研究の重要部門である人民大学人口学部の支援も得ている。これらの背景故に、紀宝成の思考は理想と現実を更に兼備している。

4 月 3 日、紀宝成は本紙記者の特別取材を受け入れた。

家庭をこんなに弱くしてどうするのか

唐勇林 2 回目の建議の表題の変化をみて私はこの問題に緊迫感を感じ、あなたの心配していることが理解できる。

紀宝成 我々の出産調整計画はすでに緊迫していて、緩和しないとまらない。人口問題は長期性のものであり後に影響を与える特徴があり、必ず早期に着手すべきで時期を失することを避けるべきである。

人口政策は国の最大の公共政策の一つであり、公共政策が優先すべき第一条件は時により異なり時代と共に進む。実際の状況に基づき情勢の変化を考察し、どう対処するかを決める。

20 世紀 80 年代に開始し実施した出産計画政策だが、人口数の問題が主要な矛盾であった当時の状況下で、この政策を実行することはやむを得ない事であり避けることができなかった。

ただし今日に至り、当時の計画出産政策はすでに 30 年近く執行された。1992 年からわが国の出生率は世代交代水準より低くなり、そこからすでに 17 年が経った。現在一組の夫婦の一生の平均出生数は 1.6 人で、毎年の人口純増数は 700 万人に満たない。私は、今の重要な問題が人口数だとは思わない。すでに構造問題が主要な矛盾となっている。中国の人口政策は重大な歴史的選択に迫られている。もし我われが前世紀 80 年代と同じ方法をとるならば、人口数の問題は更に主要な矛盾となり、おそらく問題となるであろう。

大局的観点から観れば、人口問題は国の運命にかかわり持続發展的な核心問題である。小局的観点から観れば、家庭の調和と幸福な生活に関係する。現在の出産政策が四川地震に見られるように、「一人っ子」家庭は社会的危険を受けて立つ能力が非常に脆弱であるということが分かる。子供を失った多くの家庭は挽回することが出来ない。これは家庭の不幸とみなされるが、そうではなく社会問題である。我われの社会の発展は、家庭を社会の基本単位と捉え、これがこのように脆弱ではどうすればよいのか。

私はずーっと考えていた。「一人っ子」政策は止むを得ない政策で、決して理想的政策ではない。条件が変わるならば政策の改善に尽力し、マイナス面を捨て去ることが必要だ。人類の繁栄を極める文明と国家の発展戦略の持続、調和のとれた家庭の幸せ等のどの角度から見ても「一人っ子」政策は良い政策ではない。

仮に非常に良い政策であったとしても、執行して一段階経過したのちに明らかに弊害が出て、その上だんだん酷くなってくればどうして解決しないでいられようか。

人口構成問題が主要な問題

南方周末 貴方は人口性別問題を主要な矛盾であると提起していますが、具体的な指針を述べてください。

紀宝成 人口構成問題は 20 世紀 80 年初頭に存在したが、実際の影響はそれほど大きくなかった。政策が実施されてから 30 年経って人口構成問題がだんだん顕著になり、主要な矛盾になってきた。

第 1 の問題は、性別の比率が正常値を大きく乖離したことである。この問題は 1982 年にすでに初端が見られ、女子 100 の出生に対し男子 108.5、2000 年には 117、現在は 120.56 になった。このように正常値から大きく乖離したことは、記録された人類の歴史上には無かったことである。120 人の男の子が 100 人の女の子に対応する、このような人口比率で、長期間対応すればどのような問題が起きるか、20 年後にこの結果の顕著な現象が開始されたとき、中国はどのような状況になるだろうか。性別比率がこのように崩れてしまっているのに、我々がまだ注意せず、人口一人当たりの資源、環境、水などばかりを気にしているのは正常ではないのではないのか。

第 2 の問題は、老齢化である。老齢化の意味は寿命の延長であり社会進歩の現れであり、当然一つの好い現象である。ただし、わが国の低出産政策の加速作用で、発達した国家が 100 年から 200 年で老齢化社会に入るのに、わが国はたったの 30 年で、豊かになるより先に非常に早く老齢化してしまい、社会保障を含めた多くの制度をレベルアップさせられない。統計に基づくと老齢人口の増加のみならず、労働力も老齢化する。来年から始まるが 20 歳から 24 歳の青年労働力は大幅に下降する。これは理解力の最も早い、思考力の最も敏捷な、エネルギーの最も豊かな一群—ただしこれらの一群も 10 年の歳月を経れば減少するが、この問題は重大な問題である。

第 3 の問題は、都市と農村の統一的発展計画案配の問題である。我われの以前の政策は都市と農村の 2 元組織の均衡の政策であり、都市は 1 人、農村は 1.5 人である。現在中央政府は、都市と農村の協調の発展を唱えており、流動人口は大幅に増加し、戸籍制度も改善している地方も

あるが、それでも都市と農村それぞれの政策があり、行政での解決は困難だと思う。

南方周末 貴方は建議の中で、「一人っ子」政策が、教育問題をかかって無かった困難な問題としたと述べていますが。

紀宝成 私はかつて別の場所で述べたことがあるが、皆さん教育部門を批判しないでほしい。中国の教育部門関係者は大変立派であり、古今内外で未だ遭遇したことがない難問題に直面している。8000万人を超える「一人っ子」を抱え、幼稚園の養育から大学の卒業までの世話をする国は、中国以外にはないことで素晴らしい。「一人っ子」の教育は難しい。中国では昔から教育は難しいことだ。

我々はどうして次世代の成長をこのように困難にさせたのか。「一人っ子」は当然好い教育が可能だが、但し確実に多くの困難が発生する。我われの以前の感覚は、子供の数は教育費と関連していた。一人の子供にどの位のお金が掛るか、二人であれば幾らかというように。一人っ子は安くて済むが、二人っ子はより多くの金がかかると。しかし、現在の「一人っ子」を養育するお金はかつて二人に要したお金より多額である。その上成長した結果はどうであろうか。私が思うには二人の方が教育上也遙かに良いと思う。協力概念、奮闘精神、競争意識が培われ人格形成にもよりよい影響を与える。